

エッセイ・時評

# 耕土 興論

この4月から、恵庭市の北海道文教大学に創設された地域創造研究センター(以下、センター)で新たな活動を始めた。センターは、急変する社会に対応した地域政策を、政策現場を担う地方自治体と一緒に提案し、発信していくことを目指している。

背景にあるのは、人口減少など想定を超える社会情勢の変化に対して、国が示す政策を画一的に受け止めるだけでは限界があるという危機感だ。また、これからの地方大学の役割として、地元の自治

## 小磯 修二 地域政策プランナー

### 新たな挑戦

体と連携して、独自の政策を提起し、地域の課題解決に寄与していくことが大切だと感じている。

今回センター長就任の要請があった背景には、私が長く釧路公立大学地域経済研究センターで政策研究活動を続けてきたことがある。1999年、私は行政の現場から大学研究者に転身して、地域課題の解決に向けた実践的な政策研究への挑戦を目標に独自の共同研究プロジェクト方式による取り組みを始めた。

疲弊する商店街の活性化、自立産業としての観光産業の可能性を探る調査研究、民営化による高速道路建設打ち切り政策に対して歴史的検証からの反論、生活保護受給世帯の自立に向けた支援、釧路市

の財政破綻回避に向けた再建方策など、多くの課題に取り組んできた。

それまでの大学の常識的なスキームを超える取り組みであり、苦勞や失敗も重ねたが、課題ごとに研究プロジェクトチームを組織して、幅広い内外の人々が参加しながら検討を進めていく柔軟な仕組みにより、次第に手応えのある活動ができるようになった。このような活動が地方の大学に改めて求められてきているように思う。

地方の大学のアカデミズムとは閉ざされた象牙の塔のなかだけから生み出されるものだけではない。地域に開かれたオープンな場をつくり、そこから自由闊達(かつたつ)で、既存の枠を超えた創造的なア

アイデアや提言を拾い上げながら、科学的な調査研究活動に結び付けていく役割が大切だ。

そこから中央に対峙(たいじ)する創造的な知恵と力が醸成され、活動に参加した地域の人々に蓄積されていく。さらに、このプロセスが地域の人材育成につながっていく。時々釧路を訪問して、当地域経済研究センターでの私の活動に協力、参加してくれた人たちが活躍している姿に出会うとそれを痛感する。

先月、センターのキックオフとなるフォーラムを開催した。私から具体的な政策研究の提案を行い、幅広い参加を願っている。



こいそ・しゅじゅん

地域政策プランナー、北海道文教大学地域創造研究センター長。地域研究工房代表理事、北大公共政策大学院客員教授。元釧路公立大学学長。地域開発政策、地域経済を専門とし、国内外で地域政策の研究活動に携わる。中央アジアなどでの開発支援にも取り組む。

人口減少、高齢化、さらに混迷の度を増す世界の中で、地方には多くの課題が待ち構えている。なかなか高齢の身には厳しい挑戦だが、センターの活動から課題に立ち向かう人材が育ってくれることを願っている。